

# マイトン再葬墓土器の造形に関する一考察

## A study on Plastic Form of Maitum Anthropomorphic Burial Jars

川畑 浩徳  
Hironori KAWABATA

フィリピン日本国大使館付属マニラ日本人学校教員、崇城大学芸術学部博士後期課程修了生

Manila Japanese School Attached the Embassy of Japan

Doctors' degree graduate, Doctoral Program, Sojo University

### Summary

Maitum Burial Jars were found in the Pinole Cave in Sarangani Province in Mindanao Island located in the southern part of the Philippines in 1991. Those jars are referred to as an unprecedented discovery in Southeast Asia in recent years. The lids of these jars represent human heads. Each one's expressions are subtly different. Some researchers think that they're meant to express the portrait of a deceased individual. According to the radiocarbon date, these burial jars were made in the Philippine Iron Age.

Regarding other such burial Jars, in Japan, in the middle *Yayoi* period, the eccentric burial remains were found in the southern region of *Tohoku* right down to some parts of *Tokai*. Also, in these jars, the face is attached to the neck of the jars. Furthermore, there are bone ash jars with a head figure in the abundant grave room of Etruria art.

The author presumes that it could be possible to identify the elements behind the commonality and differences occurring in these works hailing from such different cultures and geographical areas, by comparing and studying the models used to represent these figures in isolation.

In this paper, first of all, the author will examine the influence of the funerary culture on expressions, based on a survey conducted on funeral culture in the Philippines before Catholic influx. Secondly, the distinctive formative expressions seen in the existing Maitum burial jars will be scrutinized from the creator's standpoint. Particular attention will be paid to the measurement results of the proportions of the face and the commonality of expressions of each part of the face. In doing so, the author will attempt to compare findings with the model expression of the *Haniwa*, which was mentioned in a past PhD thesis. Finally, differences and commonalities in model expressions of earthenware related to funeral rituals made in different regions and times will be considered, and an analysis of how the differences in culture and ethnicity affect expressions will be done.

## 序

美術は視覚芸術と言われる。鑑賞者は、視覚を通して、その対象から感情を動かされたり、自らの思考を深めたりすることができることがある。先史美術の多くが、呪術的な要素を基本として作られてきたであろうことや、作り手が視覚芸術としての効果をある程度理解していたであろうことは容易に推測される。そのように考えると、葬送にまつわる様々な造形物には、作り手の個人的な趣向や特性を超えた、ある種の約束事のようなものの存在が認められるように思われる。そして葬送にまつわる造形物には、宗教やそれぞれの民族の死生観が大きく影響していると考えられるが、その表現には、他の葬送にまつわる遺物との何かしらの共通性も見出せるように思われる。



図1 Plate9. XI -1991-P2-133-134  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

フィリピン南部に位置するミンダナオ島、サランガニ州のマイトン、ピノール洞

窟で1991年に発見された再葬墓土器（図1）は、その特異性から東南アジアでも近年類を見ない発見であるとされている<sup>1</sup>。これらの土器の蓋の部分は人間の頭部を形作っており、その表情は一体一体が微妙に異なっているため、亡くなった個人の肖像を表現しようとしていたと考える研究者もいる。炭素年代法による測定によれば、これらの再葬墓土器はフィリピンの鉄器時代に作られたものであるという。

このような再葬墓土器については、日本でも弥生時代中期に東海から東北南部にかけての地域に、その特殊な埋葬遺跡が見られる。これらの土器にも、土器の口から首のあたりの部分に顔がつけられている（図2）<sup>2</sup>。またエトルスク美術の豊富な墓室彫刻の中にも、頭部のついた骨灰壺が存在する（図3）<sup>3</sup>。稿者は、このような異なる文化と地域で作られた埋葬に用いられた造形物を、造形のみに限定して比較研究することによって、先に述べた共通性や



図2 人面付壺  
茨城県下館市  
女方遺跡  
東京国立博物  
館蔵



図3 骨灰壺  
サライア出土  
AD650-600

違いが生じた原因を探ることができるのではないかと考える。

本稿では、まずカトリック流入以前のフィリピンの葬送文化について実施した調査をもとに、葬送文化が表現に及ぼした影響について考察を試みる。次に現存するマイトン再葬墓土器に見られる特徴的な造形表現について、制作者の立場から考察を試みる。特に顔のプロポーシヨンの計測結果や、顔の各パーツの表現の共通性について詳細に考察する。その際に稿者が過去の博士論文<sup>4</sup>で述べた埴輪の造形表現との比較も試みる。最後に異なる地域・時代において作られてきた葬送儀礼に関わる土器の造形表現における違いと共通性について考察し、文化や民族の違いが表現にどのような影響を与えるかについて、まとめを試みる。

## 1. カトリック流入以前のフィリピンの葬送文化

現在のフィリピンは、ASEAN 諸国の中で唯一のキリスト教国である。フィリピンの人口の実に 90% 以上がキリスト教徒（8 割がローマン・カトリック、1 割がその他のキリスト教）と言われている。年間を通して多くのカトリックにまつわるナショナルホリデーが制定されていて、特に毎年 11 月初旬にある All Saints' Day、その翌日と続く All Souls Day は、フィリピン国民にとって最も大切な祝日であり、家族全員で祖先の墓に集まり、故人が来世から現世に戻ってくる準備のために花や食べ物で墓所を華々しく飾る風習が根強く残っている。

このことから分かるように、彼らの家族・先祖に対する愛情はかなり深く、それに宗教的儀式が絡み合っている。

ところが、フィリピンがカトリック信奉国になったのは、1521 年にフェルナンド・マゼランが最初にセブ島に来比してから 30 年後、ヌエバ・エスパーニャ副王領となつてからのことである。その際にもたらされたと言われるサント・ニーニョ像（サントは「聖」、ニーニョは「少年」幼少のキリストを表している）は、今でもセブ島に住む人々の崇敬の対象であり、1 月にセブで開催されるシヌログ祭りはフィリピン最大のイベントとなっている。この祭りは、そのサント・ニーニョを祝う祭りである。最終日の夜明けに花とキャンドルで装飾されたサント・ニーニョの像が、マンドラウエ市からセブ市へとボートで運ばれ、セブ市中をパレードする。フィリピンの人々はサント・ニーニョの奇跡を信じていて、どんなに忙しくても祭りに参加し、サント・ニーニョ像を拝みに国中から集まってくる。また、世界中からも観光客が押し寄せ、パレードには約 400 万人の人々が参加し、9 日間の会期中、交通機関が完全に麻痺するほど熱狂する。カトリック以前にあった土着の精霊信仰は薄れ、現在ではキリスト教を熱心に信仰している。このような国民性は、フィリピンという国名が、スペイン統治時代の皇太子フィリペの名前から「フィリピナス諸島」と名付けられたことに由来していることや、彼らが、家族愛の拠り所としての宗教心を形を変えながらも保ち続けてきたこと、また、外来の価値観に対してそれを柔軟に受け入れてきたこ

とからも理解される。その他の東南アジアの国々と同様に、植民地化の影響を幾度となく受けてきたフィリピンは、その都度過去の歴史的記録を抹消されてきた。そのため、フィリピンにもともとあった宗教的な遺構はほとんど目にする事ができない。しかし、本稿で取り上げるミンダナオ島の南西に位置するマイトン、ピノール洞窟で発掘されたマイトン再葬墓土器は、キリスト教と、それ以前に主にフィリピン南部のミンダナオ島と、現在のインドネシアのあるボルネオ島エリアを1400年代に統治していたイスラム王国のスルー王国の影響を受けたイスラム教に先行する彼らの宗教観を垣間見ることのできる、現在目することのできる唯一の宗教的な遺物と考えられる。そこにはまた、家族や祖先を大切にしてきたフィリピンの人々の宗教観を具現化しようとした試みを見出すことも可能であろう。

## 2. マイトン再葬墓土器の頭部の造形的特徴と制作者の意図に関する考察

フィリピン国立博物館では、出土した136点の頭部のついた再葬墓の蓋の部分は、まず着色が施されているものとそうでないものとに分類され、さらに着色された部分の違いによる分類、頭部と顔の部分の形による分類、そして頭部に穴の開けられたものとそうでないものとに分類されている<sup>5</sup>。これらの分類方法は、考古学的には、外観に現れた特徴に基づく分類と言える。稿者はこれらの分類方法とは別に、ま

ず制作方法からの分類、次に表現方法と表現意図についての推測に基づく分類を試み、それら全てに共通している要素を根拠に、再葬墓土器の造形表現における共通性を見出し、古代の造り手の制作意図を考察していく。

再葬墓土器の容器部分と蓋の部分が完全に残った状態で出土したものはPlate 10. (図4) 6の土器であるが、この完全な土器からおおよその制作技法は推測される。

この土器には、その内部にさらに小さな別の容器があって、その中に人間の骨の断片と意図的に抜いた歯が収められていた。受け皿部分は、口縁部分に向かってややすぼまっていく大きな円筒形をしており、その表面はきれいに均されている。そして、そこに頭部のついた蓋がかぶせられている。一見人間の上半身にも見えるこの蓋の部分は、そのまま器を反転させると口縁部が広がった容器のような形になっている。このことから、このような器を作る際には、日本の古墳時代の埴輪と同じように輪積みの技法で粘土を積み上げていき、轆轤



図4 Plate 10. XI-1991-P2-130  
The National Museum of Philippines

でその器面を均していったのではないだろうかと推測される。これらの土器が作られた時期は、炭素測定によって紀元前5年から紀元225年<sup>7</sup>の間までと考えられており、同時期に隣国のヴェトナム等を通じて轆轤による製陶技術が獲得されていたであろうことが、土器の制作者の起源が北インドシナと中国南部であるとの研究<sup>8</sup>があることから推測される。器の厚みが0.7cmであることも、手びねりではなく、轆轤による制作の可能性を示唆している。轆轤による制作であるから、頭部のイメージは天地反転した状態で想像する必要がある。まず反転した頭部を壺状に作り、筒状の首部を続け、最後に肩から胴部につながる容器の蓋の部分の広い口縁部分を作ったと思われる。そして次に粘土が完全に乾ききってしまう前に、轆轤から切り離し、器を反転させ、最初に作った小さな壺上の部分にすばやく人の頭部を造形したのであろう。その場合粘土の乾き具合によって頭部の輪郭は大きく異なってくる。このことが先のフィリピン国立博物館の形状の差による多様な分類に反映されていると考えられる。つまり、粘土の乾燥が不十分な状態で上半身部分まで粘土を積んでしまうと、頭部の容器部分は当然重量で沈んでしまい、きれいな卵形の輪郭を留めることができないのである。稿者は、学位論文「人物埴輪の造形に関する研究」(2008)の中で、埴輪の頭部のプロポーシヨンの計測を行い、それらの表現中に意図的な童子形化を見出した<sup>9</sup>。しかし、マイトン再葬墓土器には、そのプロポーシヨン計測から、制作者の表現上の配慮や意図を汲み取ることは、無意味であ

るように思われる。なぜならば、前述の説明のように、制作者の意図によらず、制作方法による制約によって顔部の比率が決まってしまったであろうことと、ほぼ全ての土器の中で壺型の頭部側面から圧力をかけて、顔の形を整えようとした痕跡が全く見られないからである。後者の土器は、このような壺形を基準としてそこに目鼻などの顔の各パーツを造形して人物の頭部を作ったと思われるものがほぼ全体を占めており、数点だけが可塑性を生かして彫刻的に人物像を表現したものとなっている。

以上のような事実から、次に顔の各パーツの造形に注目し、そこに表現上の分類が可能であるか否か、または共通した表現が見られるか否かについて考察を試みる。

### (1) 目

頭部の印象を最も決定づける目の表現については、マイトン再葬墓土器の特徴は、形のわずかな差こそあれ、目の外形部が明確に線刻されるか(図5)、あるいは目の周囲に天然の黒い顔料で輪郭線が施されているのが特徴となっており(図6)、際立った表現をとることが多い。



図5 Plate 1. XI -1991-P2-145 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影





図6 Plate3. XI-1991-P2-85 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

さらに細かな表現に注目すると、面部がはっきりと残っている出土品の多くに、眼球の瞳部分を立体的に表現しようとする意図が明らかに見てとれる。例えば、眼球口縁部分を鋭利なヘラのようなもので深く切り込み、瞳の中心が盛り上がるように工夫した表現を施したものもあれば、あるものはなだらかな眼球の曲面部分に天然の黒の顔料を用いて瞳を描く方法をとっているものもある。稿者は前述の学位論文の中で、埴輪の目の彫り透かしの表現に注目したが、マイトン再葬墓土器群中には、同じように目を彫り透かして表現したものは1点も見られない。埴輪の目の彫り透かしは、土器焼成時の破損を防ぐ空気穴であったと一般的に考えられたりもするが、マイトンの土器のように目を彫りすかさなくとも破損せずに焼成できていることから、埴輪の目の彫り透かしが特異な表現であったことが再確認されるのである。彫刻においては、とりわけ肖像彫刻においては、瞳の表現はとても重要な意味がある。等身大の人体像の場合、多くの作家は、作品が個人的な作品と捉えられないように、量感やムーブマンなどを普遍化したより強い表現を試みるが、その場合、現存する古代ギリシア彫刻の大理石像の目のように、瞳を消極的

に表現する傾向にある。つまり、瞳の表現は、普遍化と個別化の分岐点になるのである。

マイトン再葬墓土器の眼球の表現と瞳の表現の意図するところは、従って像の制作者がまさしく像の個別化を望んで、かつて生きていた個人を特定させる肖像表現を試みたことを推測させるように思われる。

## (2) 眉

眉の表現は、肖像表現においては、人物の性格や感情を表すためのとても重要なパーツである。眉周辺には多くの筋肉が複雑に関係しあって、喜びや、悲しみ、怒りを表現することを可能にしている。例えば、印象派の画家ロートレックは彼のカリカチュアの中でこの眉の表現を巧みに利用して人物の感情や性格を表現している<sup>10</sup>。ところが、このマイトン再葬墓土器の顔の表現では、制作者は眉の表現に重点を置いてはいないことが分かる（図7）。



図7 Plate16. XI-1991-P2-38 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

器の表面に粘土を貼り付けて、その後丁寧に均して眉を表現しているが、その殆どが、緩やかなアーチ状のほぼ左右対称形に作られている。中には、眉の稜線が鼻筋に不自然につながるように形骸化された表現

もかなりの割合で散見される。以上のことから、彼らの興味は人物の特定にあるのであって、内面の感情を瞳の表現のようにこだわって表出させてはいない。

### (3) 鼻

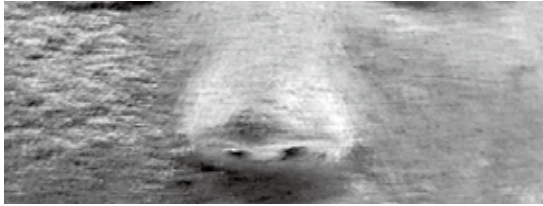


図8 Plate14. XI-1991-P2-142 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

眉の表現と同様に、鼻の表現においても、マイトン再葬墓土器の制作者が特別な配慮をした形跡は見られない。容器の表面に三角錐状の粘土を貼り付けることで、そこを顔の正面であることを目安とした後は、鼻の穴に棒状のヘラのようなもので穿孔を施しているのみである（図8）。しかし、このような鼻の表現における興味の喪失は、現代のファッションイラストレーターにも見られる。また、鼻を、単純な4つの面で様式化して表現する方法はアフリカのマスクにも数多く見られる。鼻が頭部の構造上重要なものであると認識し、また鼻によっても感情の表現や威厳、存在感などを表現できると理解するまでには、技術的な修練がかなり必要であると同時に、審美眼の獲得も必要であるため、これらの土器の表現は未熟であると言えるかもしれない。

### (4) 口

マイトン再葬墓土器の顔の各部分の表現の中で、特徴的なものの一つは口の表現である。同再葬墓土器の全体的な作りは、まさに卵に目鼻を付けたような単純なものである。顎の部分にも、壺型の曲面部分に、それと分かるようにわずかに粘土で首との境目が分かる程度の造形が施されているものが多く見られ、その上に線刻された口が形作られている。その周辺には僅かな粘土によって盛り上げられた唇が確認できるが、上顎を意識して作られているものは見られない。しかし、そのような単純な口の表現であっても、ほとんどすべての人面土器の口の中に、歯が整然と並べられており、執拗な線刻で表現されていることは特筆すべきであると考えられる（図9）。



図9 Plate24. XI-1991-P2-147 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

わずかに開いた口の幅が数ミリしかないものでも、口の中に隙間なくびっしりと歯が表現されているのである。肖像表現においてこのように僅かに歯を見せるのは、一般的には喜びをともなった笑顔の表現の場合である。笑うことで頬骨筋が引き上げられ、目の下瞼部分がストレートになるように細められる等、笑顔の表現には、顔の他のパーツとの関係性を考慮する必要があ

る。一方、悲しみや怒りの場合は、大きく口を開け、歯を見せるが、それと同時にそれらに応じた眉の表現や目の表現が必要となる。メキシコベラクルス州で出土した笑う人物俑（図10）は、この特徴を見事に表現しており、同じ焼成土器として比較してみると、その表現の特異さが明確となる。



図10 「Smiling Figure」  
The Metropolitan Museum of Art  
7<sup>th</sup>-8<sup>th</sup> century Mexico,  
Mesoamerica, Veracruz

これらの土器では、眉には特別な関心は払われず、目はアーモンド形が一般的であり、そこから感情を読み取ることはできない。無表情にもかかわらず、僅かな隙間から歯が覗いているために、見る者に不気味な印象を与える。また、本来、笑いの表現では、頬骨筋が引き上げられることによって、口と鼻の距離が短くなるが、マイトン再葬墓土器の場合は、逆にその距離が通常の比率よりも離れているため、悲しみを伴った表情が感じられる。マイトン再葬墓の場合は、笑いと悲しみが、同時に表現さ

れているように見えるために違和感を与えるのである。こうした複合的な表現を彼らが意図的に試みたと考えるよりも、単に技術的な未熟さやデッサン力の欠如によりこのような作風になったと考える方が自然であろう。しかし、先に紹介したベラクルスの笑う人物俑（図10）も、同じく二次埋葬の際に用いられたものであり、その笑いの意味が、反意的に死を意味するとする研究もある。したがってマイトン再葬墓土器の制作者も、死に対する反意的な表現として、僅かに歯を見せることで、死の表現を試みた可能性も考えられる。また、このマイトン再葬墓土器の2つに分割された下の容器内に人骨の破片と同時に、いくつかの意図的に抜かれた歯が発見されていることから、彼らが歯に対して何らかの呪術的な意味や願いを込めていた可能性もありうる。

## (5) 耳

マイトン再葬墓土器の耳の表現については、国立博物館の研究チームはその形状を二つのタイプに分類している<sup>11</sup>。一つは外耳上部を楕円状に表現してそこに耳たぶをつけたタイプ（図11）で、この際、耳たぶには当時の風習であったと思われる大きな穴が開けられている。2つ目は耳が大きくカールした外耳で形作られており、一見、耳に円筒状の筒が張り付いたように見えるタイプである（図12）。

肖像彫刻における耳の役割は、鑑賞者が頭部全体の量感と、正面からは見えない部分へ回り込む動勢を感じられるようにするための大切なパーツである。ところがマイ



トン再葬墓土器の制作者には、耳の表現にそのような意識は見られない。出土した多くの土器の外耳部分は、容器から剥がれ落ちて、頭部がまさしく容器と一体化して見えるような状態になっているものが多い。先に紹介した完全な形で出土した Plate10（図4）でも、左右の耳の作りが全く異なっており、その位置も明らかに左右でズレが見られるため、当時の工人は耳の造形に対する興味はかなり低かったように思われる。

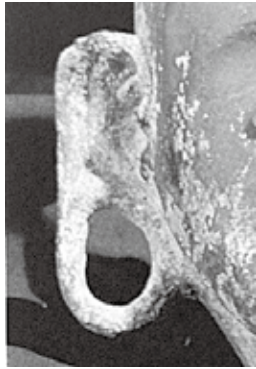


図 11 Plate6. XI-1991-P2-148 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影



図 12 Plate9. XI-1991-P2-133 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

## (6) 頭髪

マイトン再葬墓土器の中で次に特徴的なのが、頭髪の表現である。フィリピン国立博物館では、頭部に着色を施してあるものと無いもので分類しているが、着色を施されている頭部の場合、顔をヘマタイトで赤く着色されたもの 27 点のうち 15 点は、毛髪を黒の顔料で丁寧に塗り上げ、磨き込んで表現されている（図13）。

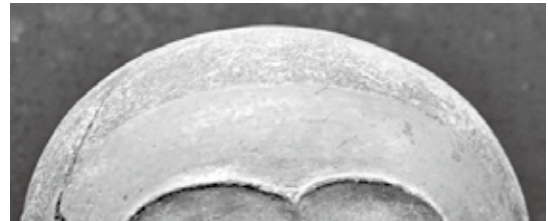


図 13 Plate3. XI-1991-P2-85 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

それらとは別に着色されていない像 43 点のうち 34 点の頭髪部分には無数の穿孔が開けられている（図14）。

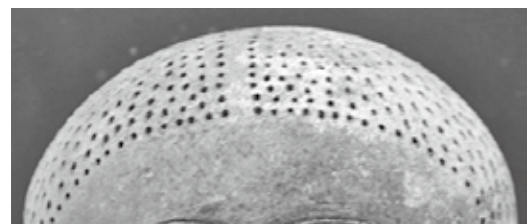


図 14 Plate20. XI-1991-P2-41 部分  
The National Museum of Philippines  
稿者撮影

同様に胸の部分にのみ大きな S 字模様の彩色が施されているものがあり、それらの中には、頭髪部分に穿孔が施されている例が見られる。当時の制作者は、おそらくこの穴に粘土とは別の素材を差し込み、頭髪

を表現しようとしたものと考えられる。頭髮は、おそらく植物性の何かで代用されたと思われ、今では全て消失しているが、まるで美容師の整髪の実習用の頭髮を埋め込んだマネキンが朽ちた様子に似て不気味である。ただし、当時は、藁のようなものを差し込み、それを頭髮として代用していたとも考えられることから、より自然な印象であっただろうと推察できる。しかし、一般的に粘土の肖像彫刻で、このように別の素材を用いて頭髮の表現をする例は、これまでほとんど見られない。おそらく制作者の誰かが、より自然な表現を求めた時に別材による表現を試み、それが効果的であったがゆえに、継承されていったのではないかと考えられる。いずれにせよ、このような自然な外観を得ようとする工夫は、先に目の造形の部分でも論じたように、この肖像を個別化し、生きていた当時の様子を再現しようとした結果たどり着いた表現と解することができよう。

## まとめ

マイトン再葬墓土器の造形についての考察を通して、制作技法上の制約によるプロポーションや形状の不自然さは別にして、彼らの肖像の個別化を図ろうとする目の表現や、意図的に歯を見せようとする表現には、古代の稚拙な技術の制約の結果ではない別の意図を読み取ることができるように稿者には思われる。同じような再葬の文化の存在が認められる縄文土偶の怪異な表現については、身近な人の死を取り扱ったものではなく、神像的な表現を求めたがゆえ

にそうした表現になったと考える研究者もいる<sup>12</sup>。それに対して、マイトン再葬墓土器はまさしく死者の像であり、死者像は死者に似せてつくられている。死者像は葬送において死者の代わりであり、特定できる個人であり、死者を意識して（性別の表現、顔面表現など）つくられ、個性的な処理が施される。このような意味で、死者像は肖像的位牌であったとも言える。それゆえに彼らは目の表現や、肖像の全体感を決定する自然な頭髮の表現などに工夫をこらしてきたに違いない。さらに、そこにやや奇異とも思える執拗な歯の表現を試みることにより、死者像を単に個人の肖像とするだけでなく、神像にも通じる畏れの感情を見る者に与える工夫を試みたのではないだろうか。

いずれにせよ、彼らの先祖に対する崇敬や、神を身近な拠り所とする文化は、形は変わっても現在のフィリピンの人々の間に受け継がれていっていると言えよう。

## 〔注〕

- 1 Eusebio Z. Dizon, *Faces From Maitum The Archaeological Excavation of Ayub Cave*, (Manila: The National Museum of the Philippines, 1996), p. 6.
- 2 山形県立博物館 (1995) 『古代人の原像』 p. 7 図63
- 3 澤柳大五郎 (1990) 『様式の歴史』 (株) 美術出版社 p. 40
- 4 川畑浩徳 (2008) 「人物埴輪の造形に関する研究」 崇城大学博士論文 p. 49参照。
- 5 前掲 *Faces From Maitum The Archaeological Excavation of Ayub Cave*, pp. 74-75参照。

- 6 前掲 *Faces From Maitum The Archaeological Excavation of Ayub Cave*, p. 33 参照。
- 7 前掲 *Faces From Maitum The Archaeological Excavation of Ayub Cave*, p. 54 参照。
- 8 前掲 *Faces From Maitum The Archaeological Excavation of Ayub Cave*, p. 6 参照。
- 9 川畑浩徳（2008）「人物埴輪の造形に関する研究」崇城大学博士論文 p. 58 参照。
- 10 Gary Faigin（1990）*The Artist's Complete guide to Facial Expression*, p. 69 参照。
- 11 前掲 *Faces From Maitum The Archaeological Excavation of Ayub Cave*, p. 76 参照。
- 12 渡辺 仁（2001）『縄文土偶と女神信仰』同成社 p. 48

